（昭和37年3月12日
第三種郵便物認可）

令和元年10月10日

（第696号）

国民同胞

発行所
公益社団法人　国民文化研究会
（九州←→東京←→全国）
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替　00170-1-60507
電話　03-5468-6230
ＦＡＸ　03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp

月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料　年間2000円

上皇陛下の戦歿者への「御眼差し」

―「硫黄島」の御製に大御心を仰ぐ―

小野吉宣

平成の御代において、天皇陛下の靖国神社への御親拝がなされなかったことについては一部にとかくの論議があった。陛下の御親拝を強く願ふ者であるが、国外と通じたかに見える朝日新聞を初めとする国内メディアの濫れ切った報道の前に、総理の参拝さへ大事件であるかの如き状況が長く続いてゐる。

発端は「公式参拝に拘った昭和六十年八月の中曽根首相の参拝」の際の国内メディアの報道と論説だった。それまで国外からの声はなかった。その際、中韓の干渉を正当であるかのやうに大々的に国内に拡散したのであった（全国紙では産経新聞が一貫して節度を守った）。以来三十年余、総理の参拝自体が大事（おほごと）となって、参拝を控へることが常態化してゐる。まして陛下の御親拝をやである（春秋の例大祭には勅使が差遣されてゐる）。

御親拝を仰ぐことは叶はなかったが、上皇陛下は、俗世の動きとは別に、かねて戦争への深い思ひを述べてをられた（『新天皇家の自画像 記者会見全記録』文春文庫、平成元年）。

昭和四十九年十二月十八日、上皇陛下（当時、皇太子殿下）の四十一歳のお誕生日を前にした御会見では、記者からの大東亜戦争について「『木戸日記』なども読んでおられると聞いていますが」との質問に、次のやうにお答へになってゐる。

「私が終戦を迎えた時は小学校六年で、戦前のことは様々な本を読んで考えています。終戦後、東京に戻った時に一面の焼け野原だったことを覚えています。陛下の放送で日本が負けたことをはっきり知った」

昭和二十年五月二十四、二十五日の空襲では皇居（明治宮殿）や明治神宮なども被災するが、前年、上皇陛下は日光に疎開されてゐた。

さらに次のやうに言はれてゐる。

「（戦前の歴史を批判するのは）歴史家のやることであり、不十分な知識でやるのは良くないと思います。その場にいた人の気持はなかなかわからないから、（批判は）無責任なものになりやすい。今後とも原資料は機会があるごとに見ていきたい」

かなりはっきりとしたご発言だと思ふ。「その場にいた人の気持ち」を顧みずに、占領軍お仕着せの観点から、一貫して戦争を語ってきたのが、当の記者連中ではなかったか。

昭和五十二年十二月十九日、四十四歳のお誕生日を前にした御会見では、「四十四歳といいますと、天皇陛下（昭和天皇）の場合、ちょうど終戦の年にあたられることもありまして、誕生日をお迎えになったご心境を伺いたいと思います」との問ひには、次のやうに述べられてゐる。

「陛下が、ちょうど四十四歳で終戦を迎えられ、大変ご苦労になったことを本当につくづく感じます。それにつけても、この戦後の平和がしみじみとありがたいものだと思います。日清戦争以来、これだけ長く（平和が）続いたことはないわけで、それを思うにつけても、今後ぜひこの平和な日本が末永く続くことを期待したいと思っております」

昭和天皇の平和達成のご苦労を憶念される上皇陛下は、戦後の平和と戦歿者の追悼は一体のものと考へてをられると御拝察申し上げる。

精根を込め戦ひし人未（いま）だ地下に眠りて島は悲しき

右は、平成六年二月十二日、本土防衛の激戦地、硫黄島の土を初めて行幸啓された際の上皇陛下のお歌である。硫黄島には未だ一万二千余の遺骨が残されてゐるといはれる。

小笠原兵団長・栗林忠道中将が、昭和二十年三月十六日、死闘空しく最後の攻撃を前に発した訣別電報には次の歌が添へられてゐた。

国の為重きつとめを果し得で矢弾尽き果て散るぞ悲しき

陛下の硫黄島への行幸は四十九年後のことであったが、「精根を込め戦ひし」人々が今なほ地下に眠る硫黄島を「悲しき」と直截にお詠みになってゐる。わが将兵の魂の叫びをお汲み取りになられたのである。

慰霊地は今安らかに水をたたふ如（い）何（か）ばかり君ら水を欲（ほ）りけむ

硫黄島の将兵たちは、十分な兵器弾薬もなく飢ゑにも苛（さいな）まれながら、乏しき雨水を頼りに戦った。上皇后陛下は右のやうに「如何ばかり水を欲りけむ」とお詠みになってゐる。

御親拝を云々するのは結構だが、かうした御製御歌を拝することを忘れてはならないと改めて思ふ。

（元福岡県立直方高校教諭）